

実施日：10月～1月	
教科等：総合的な学習の時間	
取組名：皮革を学ぼう	
対 象：5年生	実施場所：5年教室 皮革工場 他
ア ねらい たつの市の革の良さを広めるために努力する人の思いに気付き、地域の皮革産業に誇りをもつ。そのようなすばらしい地場産業をもつ故郷に対する郷土愛を育む。	
イ 指導内容（指導略案）や取組の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・ たつの市の革製品に対する調べ学習を行い、たつの市の革の用途や様々な製品がいろいろな人に親しまれていることを知る。 ・ 本革を扱う皮革工場である「雅彦化成」の工場見学を行い、皮から革に変わっていく加工過程についての理解を深め、そこに携わる職人さんの技術や仕事に対する思いに触れる。 ・ 床革を扱う皮革工場を営む「橋本さん」の仕事場を見学し、床革を使って手作りの製品を作る様子を知る。工夫しながら床革のよりよい製品を作ろうとする橋本さんの技術や仕事に対する思いに触れる。 ・ 姫路市で太鼓づくりの活動を行う「(有)太鼓屋六右衛門」をゲストティーチャーとして招き、手作り太鼓体験を行うとともに、六右衛門さんから昔から皮産業に携わる上での人権課題に関する講話を聞く。 ・ 自作教材「お父さんが作る 床革の手袋」の学習を通し、たつの市の皮革産業に携わる職人さんの思いや願いについて知り、すばらしい皮革産業をもつ故郷を愛する思いを育む。 	
ウ 連携先：皮革工場（雅彦化成・橋本商店） （有）太鼓屋六右衛門	
エ 連携にむけての取組 <ul style="list-style-type: none"> ・ 皮革工場（雅彦化成・橋本商店）に見学に行き、工程を見せていただいたり話を聞かせていただいたりする。 ・ 手作り太鼓体験を行うとともに、六右衛門さんから昔から皮産業に携わる上での人権課題に関する講話を聞く。 	
オ 組織的な取組とその点検・評価を行ううえでの工夫点 <ul style="list-style-type: none"> ・ どの学年も人権カリキュラムの中に地域教材を取り入れ、総合的な学習の時間との関連をもたせている。 ・ 調べ学習したことをスライドでまとめ、Chromebook のクラスルームで共有している。 	
カ 評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習での発言など児童の様子 ・ ワークシートやスライドに書いた記述 ・ 見学や体験での児童の様子 	
キ 成果 神岡にある皮革工場を見学し、実際に太鼓づくりを体験することを通して、皮革産業についての理解を深め、自分たちの町により愛着をもてるようになったと思う。	
ク 課題 地域の皮革産業に誇りをもつというところまではまだ不十分であると思うので、次年度に課題意識をもって取り組みたい。また、皮革工場や太鼓づくりについては、お願いする相手が忙しい時期があり、学校の希望で日程を調整することが難しかった。学習の流れと体験の時期をうまく調整しながら学習を進める必要があった。	

～たつの市の魅力を見つけよう～ 「皮から革へ」

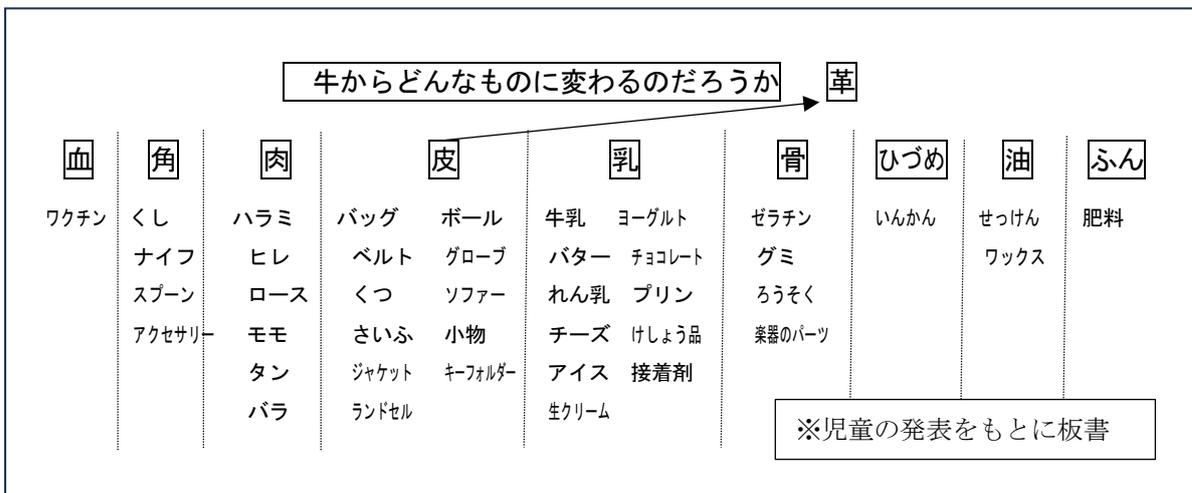
1 はじめに

児童は総合的な学習で、3年生では「神岡町」、4年生では「御津町」とたつの市の中の特定の地域について調べ学習をしてきている。しかし、たつの市全体のことは知らないことも多く、社会科の産業についての学習と関連させながら、たつの市の魅力について学習を進めていった。たつの市の特産品について調べていく中で、様々なものが揖保川の水を生かして生産されていることに気がついたが、皮革についてはどうしてたつの市で盛んなのかはっきりとした理由が分からず、皮革産業がどうしてたつの市で盛んなのかという学習課題をもった。

2 取組

(1) 牛からどんなものになるのだろうか

児童は皮革製品の多くが牛の皮からできることについては知っていたが、「キミの家にも牛がいる」という絵本で、牛が皮以外にもさまざまな部分が身近なものに姿を変えてわたしたちの生活に役立っていることに気が付いた。その中でも牛の命をいただく本来の目的は肉だという児童の共通の認識のもと、どのように肉に加工されているか「ブタさん、いのちをありがとう」という動画と「いのちをいただく」という絵本で学習した。この学習をする中で、生産者の方や牛の加工に関わる人たちが、牛をただ「肉」として育てているのではなく、大切な命、大切な存在として関わっていることを知り、だからこそ、肉以外のさまざまな部分を余すことなく利用し、命を無駄にしないようにしているということに考えを深めていった。それから、実際に牛がどのようなものに姿を変えているかより詳しく調べることで、思っていたよりも様々なところで牛の命が活かされていることに気が付いた。中でも革の製品がとても多く見つかったが、ランドセルや革靴、バッグや財布など、自分たちが知っている革製品と牛の皮が結びつかず、本当に牛の皮が皮革製品になっているのか疑問に感じている児童もいた。



(2) 皮革工場見学

牛の皮がどのように皮革製品で使われている革に加工されているのか、なめしを行う皮革工場に見学に行くことを計画した。工場見学では、大きな工場の中でたくさんの工程を経て皮が形を変えていくことや、工場で働く人たちの技術や真剣な仕事ぶりを目の当たりにし、また、実際に加工された革や製品に触れさせてもらうことで、皮革産業のすばらしさに気付くことができた。

次に、革を実際に製品に変えている工場に見学に行った。この工場では、お客さんの要望に合った製品を作るために、型取りから縫製、使う素材の工夫など、ほとんど手作業で手袋を作っておられた。ここでも、職人さんの技術を見たり、お客さんの希望に合った商品を高い品質で作るために一つ一つ真剣に取り組んでいるお話を聞いたりすることで、さらに深い学びをすることができた。

雅彦化成見



【牛の原皮を見せてもらっています】



【大きな革になりました】

(児童の感想)

- ・ 牛の皮が革になるまでの工程を見て、こんなにたくさんの作業があるんだなと思いました。いろんな薬品を使って、いろいろ大変な作業をしてできた牛の革なんだなあと感動した気がしました。
- ・ 革製品ができあがるまでには、いろいろな過程があることがわかった。クロムでなめしをしたら薬品の色で青くなることを初めて知った。タンニンという薬品でなめすと白くなりなめがわになる。化学反応でなっているらしい。どんどん知っている革になっていって、すごいなと思った。東北や海外にも行くらしい。
- ・ パンフレットに「革製品を作るためだけに動物の命をいただくことはありません」と書かれていた。牛の皮は、牛を肉にする時に余った皮を使っているということが分かった。

【橋本商店見学】



【できあがった手袋を見えています】



【手作業をされています】



【ミシン作業です】

(児童の感想)

- ・ 手袋やジャンパー、ズボン、足のカバー、手首のカバーなどを作っていることが分かりました。主に手袋を作っていて燃えにくい手袋を作っているそうです。前来た時にはなかったガラス繊維の布をさわられてうれしかったです。
- ・ 橋本商店は、床革と本革で、手袋やエプロンなどを作っていました。手袋は2種類あり、左右で14のパーツを使う手袋、12種類のパーツを使う手袋がありました。手袋は裏返っている状態なので、竹の棒と木の棒を使ってひっくり返しているそうです。布に「ケブラー」という種類があります。「ケブラー」の布はがんじょうなので、はさみで切るときは専用のはさみがいるそうです。「ケブラー」の布は防弾チョッキにも使われるそうです。
- ・ 神岡の手袋はすごいなと思いました。橋本さんと奥さんだけで手袋を作っていたからです。他に驚いたことは、ケブラーがとても強いことです。橋本さんがぶら下がってくれた時にも破れなかったのです。さすが、神岡の手袋だなと思いました。

[別紙③]

(3) 太鼓作り体験

工場見学の後、太鼓屋さんが来てくださって牛の革を使った太鼓づくりを行った。太鼓屋さんにご自身が皮革に関わる仕事をしていることで差別を受けた経験や、自分がつらい経験をしてきたからこそみんなに自分や周りの人の「命」を大切にしてほしいというお話をさせていただきながら、みんな一生懸命に太鼓づくりに取り組んだ。自分だけの太鼓が作れたので、さらに皮への愛着をもち牛の命だけでなく、自分たちの命にまで思いを深めることができた。



【話を聞いています】



【しっかり紐をしめています】



【出来上がって飾っています】

(児童の感想)

- ・ 職人さんは、お客さんを大切にしているんだなと思いました。きっとお客さんが喜んでくれるのがうれしいんだなと思いました。この職人さんのあとをどんどん継いでいけたらいいのになと思いました。
- ・ 六右衛門さんの職人技がすごかった。話を聞いて親に感謝の気持ちを伝えようと思った。また、革の仕事をしていて差別されたことがあると言われたけど、差別はしちゃだめだと思った。

六右衛門さんへ (児童の手紙より抜粋)

- ・ 今回はありがとうございました。私は自分のたいこを作ったことがなくて、作れた時はこうふんしました。意外だったことは、革がぬめぬめしていたことと力わざだったことです。すごかったことは、革が水をつけたらあんなにのびたということです。分かったことは、親のために「ありがとう」とか気持ちを伝えることが大切だということです。
- ・ 私はひもを通す時に自分では力いっぱいしたつもりでもなかなかできずに、「やっぱり職人さんは手なれていてすごいな。」と思いました。それから、六右衛門さんの話を聞いて、私も一日一日を大切にしようと思いました。
- ・ 今日はたいこについて興味や楽しさが感じるようになりました。ぼくは、たいこについてもっともっと知っていきたいです。今日は協力ありがとうございました。

(4) 総合・人権の学習で使った資料

○「いのちをいただく」

原案：坂本義喜 作：内田美智子 絵：魚戸おさむとゆかいななかまたち 発行：講談社

○「きみの家にも牛がいる」

作：小森香折 絵：中川洋典 発行：解放出版社

○「牛革のランドセルができるまで」

写真・文：上吉川祐一 発行：文一総合出版

(5) 道徳（人権）の授業実践

第5学年 道徳科（人権）学習指導案

- 1 主 題 皮革産業に携わる人々の思いを知り、皮革産業に誇りをもとう
道徳の内容項目 C（17）伝統や文化の尊重、国や郷土を愛する態度
人権の視点 2－（2）－ア 差別と人権問題についての学習

- 2 資 料 「お父さんの思いのこもった 床革の手袋」（自作）

3 趣 旨

- 本学級の児童は、総合的な学習の時間に、たつの市の地場産業を調べる中で、皮革産業が盛んなことに興味をもった。絵本「いのちをいただく」「きみの家にも牛がいる」や「ブタさん、いのちをありがとう」の動画で、牛や豚の命をいただいて肉を食べることができたり、肉以外にも様々なものに姿を変えて私たちの生活に活かされたりしていることを知った。また、なめし工場の見学を通して、皮から革へと変わる工程について学んだり、加工工場を見学し、そこで作られている床革製品についても学んだりしてきた。さらに、太鼓作り体験をすることで、革の良さに触れることで、皮革製品に愛着をもつようになった。これらの学習を通して、皮革産業が地域のすばらしい産業であることを理解した児童が多いが、皮革産業に携わる人々がどんな思いで努力し続けているかを考えるまでには至っていない。
- 本教材は、地域で床革を加工し、手袋などを製作している方の仕事に対する思いを聞き取ったインタビューをもとに作成したものである。父が作る床革の手袋の良さを感じることができないぼくが、父との会話や父の働く姿を通して、父の作る加工品の良さや父の努力を知ることになる。何度も何度も試作品を作る工程や父の話から、父の製品作りにかかる思いや製品の素晴らしさに気づき、皮革製品に対する思いが変わっていくという内容になっている。床革の手袋のよさに気づき、父の仕事への思いに対するぼくの心情に共感することで、皮革産業に携わる人々の思いを感じるとともに、地域の皮革産業を正しく理解しようとする態度を養うのにも適している。
- 指導にあたっては、導入で、総合的な学習の時間に学んだことをふり返らせ、工場見学で見た床革の実物を提示し、自分たちの町の産業であるという興味関心を高めさせる。その後、事前に読ませた資料のあらすじを確認する。まず、工場で袋づめを手伝っているぼくのつぶやきから、ぼくが父の作る床革の手袋の良さをまだ理解していないことをおさえる。次に、「いつもと同じ床革がかっこよく見えたのはどうしてか」について話し合わせる。最初と最後のぼくの心情を対比しながら考えさせることで、床革の手袋への見方の変容に気付かせていきたい。また、父の会話の中の言葉から、床革の製品の素晴らしさや父の仕事に対する思いに気付かせていく。最後に、地域で皮革産業に携わっている方をゲストティーチャーに迎えてお話を聞く。自分自身とぼくの姿を重ねながら床革の手袋についてのお話を聞くことで、自分たちの住む町の皮革産業の良さに気付くとともに、そこに携わる職人の姿に誇りを感じ取らせたい。

4 人権の視点

皮革産業に携わる人々の努力や思いを知り、皮革産業について正しく理解することは、皮革産業に対する偏見や差別意識に出合ったときに、それらを批判する力の素地となる。これは、今後部落史学習を進めるうえで大切である

[別紙⑤]

5 本時の目標

父の作る床革の手袋の良さを知り、父の仕事への努力や熱意に共感することで、地域の皮革産業への誇りをもつ。

6 学習の展開

児童の活動	指導上の留意点（◇は評価）	備考
<p>1 これまでの学習を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>父が作る床革の手袋が、かっこよく見えたのはどうしてだろう</p> </div>	<p>○床革を提示し、工場見学で学んだことを想起させる。</p>	<p>(全体) 床革</p>
<p>2 資料を読んで、 ぼく的心情を話し合う。</p> <p>(1) 工場で袋づめをしているとき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この手袋、誰が使っているんだろう ・かっこいいものを作ったほうがいいな ・どうしてこんなに手間がかかることをしているんだろう <p>(2) 父の作業をじっと見つめているとき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・型紙は、どれも同じだと思っていた ・型紙を作るのがこんなに大変だったなんて知らなかった ・がんばったのにやり直しなんて ・次は、うまくいくのかな 	<p>○工場で袋づめを手伝っているときのぼくをつぶやきから、ぼくが手作業であること理由や父の作る床革の手袋の良さに気付いていないことをおさえる。</p> <p>○父の作業をじっと見ているときのぼくの気持ちを考えさせることで、父の仕事の丁寧さや努力について気付かせる。</p> <p>○一つの製品を作るのに膨大な手間と時間がかかることの大変さだけでなく、父の仕事への姿勢に着目させる。</p>	<p>(全体) 資料</p>
<p>3 床革の手袋が、かっこよく見えたのは、どうしてかを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんが得意先の人の要望を聞き、丁寧に仕事をした ・父の工夫がつまっている手袋だ ・使う人のことを考えて、一人一人に合わせて作っていることが分かった ・これまでにないものを作ろうとする父の情熱を知った 	<p>○ぼくの手袋への見方がどう変わったのかを問い、床革の手袋の良さについて発言させる。</p> <p>○型ができたのだからもういいのではないかと考える僕ともう一度がんばろうとしている父の姿を対比させることで、父の仕事に対する熱意を感じとらせる。</p> <p>○父の背中が大きく見えたことから、床革の手袋や父の仕事に対する姿勢についての印象が変わったことをおさえる。</p> <p>◇父の仕事への努力や熱意に共感することで、地域の皮革産業に誇りをもてたか。</p>	<p>(個人) ワークシート ↓ (全体)</p>
<p>4 学習のまとめをする。</p>	<p>○本時の学習で考えたことや感じたことをタブレットに打ち込ませることで、本時のまとめとする。</p>	<p>(個人) タブレット</p>

「お父さんが作る 床革の手袋」

ぼくは、いつものようにお父さんの工場で革の手袋の袋つめを手伝っていた。袋つめだけではなく、生地をぬい合わせたり、ぬい終えたものをひっくり返したりするのにも、うちでは全部手作業だ。機械でやればずっと速いのに。革手袋のほかにうちの工場にあるのは、革の腕カバー・手首カバー・安全靴の一部・防弾チョッキなどどれもおせじにもおしゃれとはいえないものばかりだ。

「こんな手袋だれが使うんだよ。せつかく革のものを作るなら、ブランドもののバッグとか財布とか、かっこいいものを作った方がみんなきつとよるこぶのに。」

そう言うぼくに、父はいつも「これがええんや。」

そう答えるばかりだった。ぼくは何がいいのかさっぱり分からなかった。

ある日、父の取引先の社長さんがやってきた。社長さんは工場に入ってくるなり「前頼んだ手袋、めっちゃめっちゃよかった！工場の人たちも大喜びだよ。次の注文頼むね。」

それだけ言うと、工場を出て行った。ますます分からなくなったぼくは、社長さんを追いかけて行って、思い切ったはずねた。

「うちの手袋の何がそんなに良いんですか。」
すると社長さんは、

「私たちの仕事場では、作業で熱いものをさわったり、はげしい火花がとんできたりすることが多くてね。ふつうの手袋だと、やぶれることも多くてけがをしてしまうんだ。この工場では熱さに強いじょうぶな手袋を、一人ひとりの手の大きさに合わせて作ってくれる。この手袋のおかげで、私たちは安心して毎日仕事ができるんだよ。大きさや生地のこと、いつも無理を言っているけど、断られたことはないんだ。何度も作り直して、毎回良い手袋を届けてくれるんだよ。だから本当に助かっているんだ。」

ぼくは、まばたきをするのも忘れて、社長さんの話に入っていた。

社長さんの話を聞いてから、僕は手袋のことがずっと気になって、毎日学校から帰ると工場に行くと、父の仕事の様子を見るようになっていた。お父さんの手袋が、働く人の役に立っているんだ。でも、あのやわらかい床革で作った手袋が、火に強くてやぶれにくいなんて本当なんだろうか。

ある日、工場に行くと、そこには同じような大きさの型紙が数えきれないくらい積み上げられていて、そのそばで父は生地を見比べながら何かを考えているようだった。

「何をしているの。」

そう聞いたぼくに、父は手を止めて、

「燃えにくく、やぶれにくく、切れにくい、もつとじょうぶな手袋にするにはどの生地と組み合わせたらいいか、試しているんだ。うちの工場で、なぜ床革を使うか分かるか。」

ぼくの答えを待たずに、父は話を続けた。

「床革はやわらかいから、手袋のように細かくぬい合わせるものにぴったりだし、ほかの生地と組み合わせることで、さらにじょうぶになるんだ。」

「工場の人々が安全に使えるように、大きさや生地の組み合わせ、ぬい方などひとつひとつ変えて作っているんだよ。そんな細かい調整も、床革だからできることなんだ。手作業でたくさん時間はかかるけれど、同じ革でも、工夫次第でこれまでにない、新しくより良いものを作ることができる。おもしろいよなあ。」

父は、何だかとても楽しそうだった。

ぼくはそばにあった手袋を見つめた。いつも見ていたはずの手袋が、何だかとてもかがやいて見えた。

